

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

英 文 学 研 究

STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

Konan Women's University

第 四 十 三 号

Volume 43

(2 0 0 7 年)

甲南女子大学英文学会
Konan Women's University English Literature Society

平成19年3月30日 発行
Issued March 30th, 2007

目 次

Contents

エリザベス・ギaskellの短編小説「リジー・リー」と 「ペン・モーファの泉」の女性たち.....直野 裕子..... 1
On the Women in Elizabeth Gaskell's Short Stories “Lizzie Leigh” and “The Well of Pen-Morfa”.....NAONO Hiroko
外国語学習におけるトップダウン処理 と L1 の影響.....梅原 大輔..... 13
Top-down Processing in Foreign Language Learning and the Influences of L1 UMEHARA Daisuke

エリザベス・ギaskellの短編小説 「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」の女性たち

On the Women in Elizabeth Gaskell's Short Stories
“Lizzie Leigh” and “The Well of Pen-Morfa”

直野 裕子
Hiroko NAONO

1. はじめに—1850年出版の作品

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell) 最初の長編小説『メアリ・バートン』(*Mary Barton*) は、1848年10月に出版されるや文壇に大きな反響を呼び起こし、当時の文学界の大御所チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) にも絶賛された。1850年1月ディケンズから、社会の底辺の人々を引き上げ社会状況を改善することを目的とする新しい週刊誌への寄稿を依頼され (Gérin 106, Uglow 205)、それに応えてギaskellが寄稿した短編が「リジー・リー」 (“Lizzie Leigh”) である。1850年3月30日付けの創刊号『ハウスホールド・ワーズ』 (*Household Words*) の冒頭、ディケンズの「創刊の言葉」 (Preliminary Word) に続く名誉ある位置を飾った。4月13日までの3回に分載され (Shattock 129)、これが好評であったため、さらに依頼されて寄稿したのが「ペン・モーファの泉」 (“The Well of Pen-Morfa”, 11月16日号、23日号掲載) (Shattock 157) と「ジョン・ミドルトンの心」 (“The Heart of John Middleton”, 12月28日号掲載) である (Shattock 177)。この年には他に、8月に脱稿し12月に単行本として出版した中編小説『荒野の家』 (*The Moorland Cottage*) がある (Shelston 1)。

この4作のいずれにおいても、当時の父権制社会の中で単に男性に服従するのではなく、自分を主張し行動する女性や、男性に大きな影響を与える女性が登場する (Uglow 25)。「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」では男性に裏切られた女性の生き方が問題とされ、母親が大きな力を発揮する。『荒野の家』では息子の成長に悪影響を及ぼす溺愛する母親と、信仰に裏打ちされた理性的で大らかな愛を注ぐ母親が登場し、後者の影響を受けて実の娘ではない少女が自立心ある女性に成長する過程が描かれる。「ジョン・ミドルトンの心」では男性主人公が信仰篤い妻によって真のクリスチャンに目覚める過程が描かれる。

本論では子供のため、特に娘のために行動し主張する母親像が描かれている「リジー・リー」と「ペン・モーファの泉」を取り上げる。

2. 「リジー・リー」の女性たち

この短編の主人公はリジー・リーというより母親アン・リー (Anne Leigh) である (Pollard 87)。マンチェスターに奉公に出た娘リジーが男に誘惑されて妊娠し奉公先を解雇され、アンは娘の身を案じてすぐにも探しに行きたいのだが、夫は許さない。娘は死んだものと思え、けっしてその名を口にするなと命じる。したがって 17 歳にもならないリジーは子供を抱えて収入を得る術もなく、生きるためには転落の道を歩む他ないのは明らかであった。

リー夫妻は結婚して 22 年、そのうちの 19 年間、アンは夫を非のうちどころがないほど正しい人、神の教えを説いてくれる人として完全に信頼し夫に従ってきた。いわば当時の典型的な理想の妻であったが、夫が娘を勘当して以来、夫への反発心を抑えられず、妻としての義務感も愛や尊敬の念もかつてのように持つことができなくなる (206-7)。

しかし、夫ジェームズ (James) は妻アンに、“I forgive her, Anne! May God forgive me!” (206) という言葉を残して亡くなる。なぜ彼は神に赦しを求めたのだろうか。当時の社会規範に従ってパリサイ人のように娘を裁いて赦さなかったからである。「裁くのは神であって人ではない」、この信条はギヤスケルのすべての作品の基調をなすが、リジーに赦しを与えることがテーマとなっているこの短編では、それが顕著に示されている。ちなみに、この言葉をそのまま母アン・リーと聖母マリアを思わせるような女性スーザン・パーマー (Susan Palmer) に語らせている。

2-1 母親アン・リーの行動開始に必要な条件

2-1-1 精神的支え

夫の最期の言葉を聞いてアンは心から夫に感謝し、「再び彼を家長の座に戻し」(207)、夫を恨んだことを詫びたい気持ちになる。家族を守るためにも世間の許さぬことを認めるわけにはいかなかった夫の苦しい心中を思いやることなく、この 3 年間ただ心の中で恨み反抗するばかりであったことを悔い、自分がやさしく働きかけていたら夫はもっと早く娘を許してくれたかもしれない (“...who knew but what, if she had only been more gentle and less angrily reserved, he might have relented earlier—and in time?” 207) と後悔の念、自責の念に苦しみ、夫の亡骸につき添って離れようとしめない。ギヤスケルは、ただ夫に従うだけでなく妻の側の働きかけが必要なことを、ここ冒頭で示唆する。

彼女がようやく亡骸のそばを離れ、息子たちの用意してくれたお茶をすませた後、読んでほしいと頼んだのは、聖書の「放蕩息子の譬え話」(ルカ 15: 11-32) である。次男トムの朗読にアンは顔は明るくなり、自分でも指で字をたどりながら読む。特に悔い改めた息子を父が優しく迎える箇所、「彼女の気分は晴れやかになる」(208)。

ルカ伝では、放蕩の末帰還した弟を喜んで迎え祝宴を開く父に対して、父に忠実であった兄が抗議すると、「…このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当たり前である」と父は答える。この言葉にアンは救われ力を得たのである。母親にとっては娘も息子も同じ子どもで、娘が悔い改めて帰ってくれば、この父

のように夫も喜ぶに違いないと確信する。

作者ギヤスケルがここで「マグダラのマリア」(ルカ 7:36-50)ではなく、「放蕩息子」を取り上げたのは、Stonemanの指摘のように、現実社会が罪人に男女差別をしていることに注意を喚起するためである(43)。当時の多くの読者は、悲しみのあまりアンは愚かにもその場にふさわしい聖書の章を選べなかったと解釈したかもしれない。しかしアンに繰り返しリジーを「放蕩息子」と結び付けて語らせている(211, 230, 241)ことから、ギヤスケルの真意は明らかであろう。アンは、夫の娘を赦すという言葉と聖書の譬え話を精神的な支えとして行動を開始する。

2-1-2 経済的基盤と長男の同意

アンは未亡人になって夫の支配を受けずに自由に行動できるようになったのは確かである。しかし、死ぬ間際に娘を赦すと言った夫は、心の中ではそれを常に願っていたに違いなく、働きかけなかった自分にも責任があることに気づき、何としても娘を探しに行かなければならないと思う。しかしそれには経済的な基盤と息子たちの同意が必要である。

リー家に代々受け継がれているアップクローズ農場(Upclose Farm)は、母屋と離れ屋、荒れた収穫の上がらない7エーカーの農地からなり、これに頼るだけでは生計は成り立たず、代々息子たちは車大工や鍛冶屋の仕事に就くのが慣わしで、リー家は労働者の身分を出ることはない。夫の遺言状には、農場を「忠実な妻アン・リー」(“his faithful wife, Anne Leigh” 209)に譲り、彼女の死後長男に譲るとある。これは夫の妻への愛情の証であり、これによってアンには娘を探しに出かける経済的基盤ができる。

昔からの友人サミュエル・オーム(Samuel Orme)が預かっていた遺言状を読み上げると、アンは、農場を貸してマンチェスターに行きたいと相談を持ちかける。当然のこととして、サミュエルは息子たちの同意を条件とする。

長男ウィル(21歳)は父親に似て厳格で、妹のことを恥と思い死んだものと思っている。母の計画が無駄なことだと思うが、母が妹を探しに行こうとするのを断固として許さなかった父を厳しすぎると思っていたこともあり、1年後に帰ることを条件にマンチェスター行きに同意する。ウィルは鍛冶屋の仕事をし、姉リジーは死んだと思っている10歳年下のトムには、ほんとうの理由は知らせないで学校に行かせることにする。決定権はあくまでも長男にある。しかし、リジーの探索を決断し実行に移すのは、母アンである。

2-2 工業都市マンチェスターでの生活

マンチェスターに移って、アンは夜になると娘を探しにそっと家を出て、帰るのは夜中を過ぎる。知らぬ顔をして母の帰りを待つウィルは、疲れた母の顔に失望だけでなく希望が表れているのを見ると何も口には出せないが、母の行動を望みのない愚かなものだと思う。

2-2-1 スーザン・パーマーとの出会い

ウィルはある日、泥酔して足元のあぶない老人パーマーを家まで送り届けて、娘スーザン（20歳前後）と出会い恋をする。ウィルにとってスーザンは、汚れのない聖女のような存在で（スーザンを形容するウィルの言葉を挙げてみると、“pure and maidenly” 216、“the holy and pure” 237、“sweet, delicate, modest Susan” 217、“... she’s so gentle and so good—she’s downright holy. She’s never known a touch of sin.” 220）、妹のふしだらを知れば自分は拒否されるに違いないと思悩む。ウィルの憔悴をトムの訴えによって知った母アンは、娘のことに夢中になるだけでなく、同じ子どもとしてウィルにも愛情を注がねばと反省し、悩みを告白させる。

妹ゆえにスーザンへの想いを諦めようとしているウィルにアンは、スーザンがリジーのような娘を哀れだと思わないなら、残酷なパリサイ人だから、そんな人はいない方がウィルのためだと言う（“Will, Will! if she’s so good as thou say’st, she’ll have pity on such as my Lizzie. If she has no pity for such, she’s a cruel Pharisee, and thou’rt best without her.” 220）。

アンは元来内気なのだが、ウィルに内緒でスーザンに会いに行き、息子のスーザンへの想いを伝え、さらに勇気を奮い起こして娘リジーのことを話す。これは、ひとえに息子や娘への深い愛のなせる業であると言えよう。

アンは自分にもリジーにも深く同情するスーザンを、息子にふさわしい立派な女性だと判断する。さらにスーザンが育てている2歳のナニー（Nanny, Anneの愛称）はスーザンの姪ではなくリジーの娘で、「不義の子」（“the child of shame” 229）と踏んで哀れみ引き取って、外で働くのを止め、幼い子どものための学校を家で開いて収入を得ていることを知る。

リジーは子どもの養育費をときどき戸口に置きに来るので、今度来たらつかまえて引き留めると言うスーザンに、アンはリジーが見つければ抱いて一緒に死ぬと言う。世間はリジーに死の制裁しか認めないと思うからである。しかし、「（リジーは）マグダラのマリアのように更生するかもしれない」（225）という希望にみちたスーザンの言葉を聞いて、スーザンのことをパリサイ人どころか、「新約聖書に精通した」真のクリスチャンであり、自分と同じような考えを持つ人であると確信する（“She’s not one to harden her heart against a mother’s sorrow. . . . she’s too good for that. She’s not one to judge and scorn the sinner. She’s too deep read in her New Testament for that.” 228）。

2-2-2 母親アンの説得

アンは、ウィルに対してスーザンのようにリジーの子を愛してほしいと頼むが、ウィルには、スーザンのように神々しいまでの女性が汚れたリジーや不義の子と関わるなど思いもよらず、考える時間を与えてほしいと言う（229）。息子のこの返事にむしろ気をよくしたアンは、スーザンという強力な味方を得て自分の考えに自信をもつことができているので（松岡 231）、夫に似た性質や考え方の長男に対しても、これまでのように「懇願し、おとなしく従う母」（“the meek, imploring, gentle mother” 230）ではなく、「神の思し召しを伝える者」（“the interpreter of God’s will” 230）のように威厳ある態度で、次のようにリジーを赦して優しく迎えるように説得する。

“Will, my lad, I’m not afeard of you now, and I must speak, and you must listen. I am your mother, and I dare to command you, because I know I am in the right and that God is on my side. If He should lead the poor wandering lassie to Susan’s door, and she comes back crying and sorrowful, led by that good angel to us once more, thou shalt never say a casting-up word to her about her sin, but be tender and helpful towards one ‘who was lost and is found,’ so may God’s blessing rest on thee, and so mayst thou lead Susan home as thy wife.” (229-30)

プライドの高い頑固なウィルも、いつもとは違う母の態度や言葉に圧倒され、敬意を払うかのように頭を垂れ、“Mother, I will.”と答える。しかしながらギヤスケルは、アンが気を失いかけて息子の手当を受ける場面をすぐ後に加えて、強い母のイメージを弱める。

2-2-3 ナニーの死、そしてスーザンの父のこと

アンの喜びが最高潮に達した直後、場面は暗転し、ナニーが命を失う。ナニーの死は、リジーの罪を償うために設定してある。しかしそれは、一つにはスーザンの父の不甲斐なさに原因があることをギヤスケルは暗に示しているように思われる。ナニーは、一緒に寝ていたスーザンが、泥酔して帰った父の火の不始末を恐れて階下に降りたため、寝ぼけ眼でスーザンを探していて階段から落ちたのである。気も転倒せんばかりの中、スーザンが慌しく動き回っているのに、ぐっすり眠ったままの父親のことを、“useless, and worse than useless, if awake” (231) と述べる作者はかなり手厳しい。彼はナニーが死んだのはスーザンのせいだと責めたり、慰めるつもりで、自分たちの子ではないのだから死んでくれてよかったと言って、ますますスーザンを悲しませたり、スーザンの手助けもせず、近所に事故の顛末を話しに行ったりする。彼は昔羽振りを利かせていたが商売に失敗して以来、働かず酒に溺れ、娘に養ってもらっている。それでもスーザンは忍耐強く母親のような愛情でやさしく父の世話をする。父権制社会の下、娘は父に従うのが当然の義務とされたが、そうした点にギヤスケルが批判の目を向けているのは明らかであろう。

2-2-4 スーザンの説得

スーザンの家の二階で母と娘が再会し、罪を悔いる娘に、母アンは変わらぬ愛と赦しを与え、父の赦しを伝え、これからずっと一緒に暮らすから恐れる必要はないと慰める。一方、階下ではリジーを赦すようにスーザンがウィルを説得する場面が展開する。

ナニーの死、リー夫人とリジーが二階にいることをウィルに知らせた後、スーザンはリジーのことはすべて知っているが、わが子まで失ったその苦しみのほどは想像もつかないと言うと、ウィルは、リジーが苦しむのは当然の報いだと答える。スーザンは、「裁くのは神さまであって私たちではない」(237)、厳格さではなく哀れみの心を持ってほしいと言ってウィルを説得しようとする。

“Will Leigh! I have thought so well of you; don’t go and make me think you cruel and hard. Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness with it. There is your mother, who has been nearly heart-broken, now full of rejoicing over her child—think of your mother.”
(237-38)

ウィルは母と約束したときのように、スーザンにも考える時間を与えてほしいと頼み、次のように言う。

“If I did hang back a bit from making sudden promises, it was because not even for love of thee, would I say what I was not feeling; and at first I could not feel all at once as thou wouldst have me. But I’m not cruel and hard; for if I had been, I should na’ have grieved as I have done.” (238)

ウィルの誠実な言葉に、スーザンは自分の不用意な厳しい言葉を悔やんで許しをこう。その口調はやさしい限りで「その狼狽振りには言葉以上の多くのことを語っていた」(238)。ウィルはここで愛を確信するに至る。スーザンはウィルとの関係においては控えめながら恋する女らしさを見せるように描かれている。彼女の主たる役割は、パリサイ人的ウィルを説得してリジーを受け入れることのできる真のクリスチャンに変えていくことにあるが、彼女がウィルの恋人であることが、何にも増してその説得力を強める要因となる。

2-3 後日談、その他「リジー・リー」について

この短編の最後の1ページにリー家のその後が記される。ナニーの亡骸は、アンの夫の眠る教会墓地ではなく、昔クエーカー教徒が葬られた丘の墓地に埋葬される。ウィルとスーザンは結婚してアップクロース農場で暮らし（リー夫人は農場を生前に息子に譲ったことになる）、リー夫人とリジーは人里離れた小さな谷間の小さな家に住む。トムはロッチデールで教師になり、息子二人が母を経済的に支える。リジーは、苦しんでいる人や病人が助けを求めるときはいつでもその声に応え、多くの人に感謝されるが、わが子との再会を願い神の赦しを求めて祈りの生活を送る。リジーはわが子同様、リー家の仲間入りはさせてもらえない。しかし母アンは、社会規範の保護の枠内に留まるよりも、「失って見つけ出した大切な宝」(249)である娘リジーと一緒に暮らせることを幸せに思う。

スーザンは母となる。「みんなに幸福をもたらす明るい光となり、子どもたちは彼女のまわりで成長し、彼女のことを聖女のように思っている」(“Susan is the bright one who brings sunshine to all. Children grow around her and call her blessed.” 241)と説明されている。彼女は最後まで聖母マリア的役割を果たす存在で、リアルな人物とはいいい難い。

男性に誘惑されると、女性には厳しいモラルスタンダードが適用され、男の責任は問われな
いまま、捨てられた女性と子どもは厳しい運命を辿る。理不尽なことであるが、こうしたダブ

ルスタンダードによって生み出される不幸な女性たちを救おうとギヤスケルは社会活動も行っていたが (Uglow 246)、『メアリ・バートン』の序にあるように、「苦しむ人たちの代弁者」となってその実情を世の人たちに訴え、注意を喚起することがギヤスケルの小説執筆の動機であり、目的であった。『メアリ・バートン』のエスタ (Esther) は、男に捨てられ病気の娘のために転落の道を辿り、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) 以来の伝統の枠内に留められて、救われぬまま哀れな生涯を閉じる (Pollard 87)。こうした“fallen women”を救うに大きな力があるのは、母親の子どもに対する見返りを求めない愛で、それは子どもを生んだ母親だけにあるのではなく、スーザンのように真のクリスチャンには備わっているとギヤスケルは考えている。しかしながら、“fallen women”を救うことがいかに困難なことか、ギヤスケルはよく承知していて、一家を支配する家父長に「赦す」と言わせるとすぐ死亡させた上で、跡継ぎの (母親に対して父親ほど厳しくない) 長男を説得するために、母親だけでは足りなくて、聖母マリア的で、しかも恋人という役割まで担った女性を登場させるのである。

リジーは更生の道を歩むことになるが、子供の転落死については、Easson が言うように「不必要なほど高価な代償」 (208) に思われ、その点に当時の社会通念を超えられなかったギヤスケルの限界を見ることもできるだろう。しかし当時タブー視されていた“fallen women”の問題を小説に取り上げること自体かなり勇気の要ることで (匿名で掲載されると知っていたからこそ可能であったにしても)、それは次のようなギヤスケル宛てのリー・ハント (Leigh Hunt) の手紙によっても明らかであろう。“... I am sure you are not the woman to be custom's slave. Witness your brave and lovely good word in behalf of the unhappiest of your sex.” (Rubenius 181)

この短編ではリジーの更生については簡単に触れてあるだけで、あくまでも救う立場のあり方が問題にされている。未婚の母がヒロインになるのは長編小説『ルース』 (Ruth, 1853) を待たなければならない (Pollard 87)。

3. 「ペン・モーファの泉」の女性たち

この短編は、語り手が北ウェールズを旅行したとき、男性に捨てられた女性について聞いた話を思い出して語る形式をとる。語り手が訪れたのは、まだ大資本家が土地を買い占めに来たことがない人里はなれた村々の一つ、旅行者のめったに訪れない古い村ペン・モーファで、人々の暮らしは金銭に支配されない自給自足に近いシンプルなものであった。この短編で語られる主たる物語は、それより一世代前の人たちのことである。

3-1 最初のエピソードの母と子

最初に語られるのは、語り手が出会った厳しい顔つきの寡黙な女性—かつてはペン・モーファの美女と呼ばれていた女性についてである。彼女は奉公先の家族についてロンドンに行くが、1年ほどで帰って来たときには美貌は消え、悲しい絶望的な表情となり臨月を迎えていた。生

まれた子は下半身に障害をもち、以後彼女は、寝たきりで苦しむ子どもの看病をしながら養蜂でわずかな収入を得て暮らす。“One event had made her savage and distrustful to her kind.” (244) とあるように、彼女は男に裏切られて人を信じられなくなり、誰とも付き合おうとしない。彼女の無言の忍耐と辛抱強い子どもへの愛情は村人たちに尊敬の念を引き起こし、誰もが喜んで助けの手を差し伸べようとするが、彼女は誰の手も借りようとする。

彼女には帰る故郷があって転落の道を辿らずにすみ、辛く厳しいながらも独立自尊の生活を送る。彼女がロンドンにいる間に、わずかな金銭を残して父親が亡くなったのは、彼女にはむしろ幸いだったと思われる。父親はリジーの父同様、娘の帰郷を認めなかったかもしれないからだ。

“I dare say the story is common enough; . . .” (244) と語り手が言うように、女性が男性に裏切られるのは昔からよくある話で、この親子には名前も与えられていない。また障害を持つ子どもについてはほとんど触れられていないが、“Many, many years back—a lifetime ago—there lived in Pen-Morfa a widow and her daughter.” (245) と語り始められる主たる物語では、事故によって障害を負い婚約者に捨てられる娘が中心人物となる。母親の娘への愛、そして恋人に愛を拒否され、母の愛を拒否した娘が持つに至る見返りを求めない愛が、美しいウェールズの自然を背景に語られる。

3-2 母親エレナ・グウィン

寡婦エレナ・グウィン (Eleanor Gwynn) は小さな庭のある小さな家を夫から受け継いでいて、「なんとか自活できるだけの収入があり、貧しくもなく金持ちでもない」 (245)。この点は重要で、はじめのエピソードの女性と違って、エレナには働かなくても暮らせるだけの収入があり、娘が男に裏切られても経済的な問題は生じない。

3-2-1 娘ネストの転倒

エレナの娘ネスト (Nest) は美しく、自分でもそう思って喜んでいる。母親は娘の思い上がりをたしなめ、美しさは神様の贈物だと説教するが、娘は気にも留めない。元気いっぴいの彼女は、老若男女すべての人を喜ばせずにはいられなくて、それには笑顔と優しい言葉で十分だった。中にはそれを曲解して彼女のことを浮気女だと言う者もいたという説明もあるが、ネストが美しさを自慢に思うにしても、あるいは日課の水汲みに、婚約者エドワード・ウィリアムズ (Edward Williams) と途中まで一緒というので水汲みには不似合いな服装で出かけたにしても、Walters が指摘しているように、ネストに罪があるとは考えられていない (15)。おごりや不注意のせいで転倒したとしても、それは誰にでも起こりうることで、罪に対する報いではない。ネストは不運にも氷の張った岩場で滑って転倒し、下半身不随となり、愛する婚約者に捨てられる。結婚を前に幸せ一杯、有頂天であった娘が、急転直下弱者の立場になる。この短編は、誰でも弱者の立場になりうることを前提にした物語とっていいだろう。

母エレナはまず娘の命が助かるように必死の看護をするが、それには恋人の力がぜひ必要な

ことを知っており、エドワードの足がだんだん遠のくのを心配して行動を開始する。

3-2-2 娘の婚約者エドワードに対するエレナの懇願

「時の果て」(“The End of Time”)と呼ばれる農場の主人エドワードを訪ねたエレナは、怒りや非難を露わにしたいのを抑え、礼儀正しくエドワードの娘に対する気持ちを尋ねる。エドワードは、ネストの命は助かるが障害は一生治らないと医者から聞いたことを伝え、農場の仕事はきついから健康で有能な妻でないと務まらないと含みのある言い方をする。エレナは“Though her body may be crippled, her heart is the same . . . and full of love for you.” (252) と訴える。自分ほどよい条件でなければ結婚してくれる男もいるだろうと冗談めかして言う無神経なエドワードに、エレナは思慮分別を失ったかのように怒り、エドワードに明言を迫る。“I cannot—no one would expect me to wed a cripple. . . .”と言うエドワードに “. . . surely will God and His angels watch over my Nest, and avenge her cruel wrong.” (253) と叫んで、エレナは帰りかけるが、また引き返して謝罪し、エドワードに抗議したい思い—事故に遭う前に結婚した可能性もあったわけで、結婚後にネストが事故に遭っていたとしたら、どうするつもりだったのかと問い詰めたい思いを抑え込んで (“It was likely, was it? and you to have been her husband before this time, if—oh, miserable me! to let my child go and dim her bright life! . . .” 254)、事実を知れば娘は死んでしまうから娘が元気を回復するまで、愛している振りでもいいから見舞いに来てくれと身を屈して頼む。利己的なエドワードに対して、必死に娘を守ろうとする母エレナの忍耐と勇氣、人間としての大きさが際立たせてある (Walters 16)。

3-2-3 娘ネストに拒絶される母エレナ

ネストは回復し元気になるが、杖なしでは歩けず美貌はけっして戻ることはない。それでもエドワードが来ると目が輝く。これ以上エドワードに無理強いはできないと判断した母親はつらい思いを抑えて、ついに事の真相をネストに告げる—下半身の障害は一生治らないから農場主の妻としては失格なのだ。ネストは悲しみを胸の奥に閉じ込めたまま、以後母にも心を開こうとしない。家に引きこもって外に出ないのは、見た目のためではなく、恋人に捨てられたことを哀れに思われたくないためで、誇り高い娘は母の慰めも一切受け付けず心を閉ざしてしまう (多比羅 55)。

ネストには、エスタやリジーと違って、母となって愛を注ぐ対象もない。母エレナは娘のために長生きしたいと神に祈っていたが、慰めも手助けも拒否し、むしろ肉体を酷使し激しい疲労を伴う仕事を望む娘を前にして、なす術もない。エドワードの結婚の噂を聞いたネストは、“Mother, why did not you let me die?” (255) と言って母を責め、あまりの辛さに泣く母に謝りはするが、過去にとらわれたまま現実の自分の身を受け入れることができず、“I wish I had died when I was a girl and had a feeling heart.” (255) としか言えない。これに答える母エレナの次のような言葉には見返りを求めない娘への愛があふれている。

“... God has afflicted you sore, and your hardness of heart is but for a time. Wait a little. Don't reproach yourself, my poor Nest. I understand your ways: I don't mind them, love. The feeling heart will come back to you in time. Anyways, don't think you're grieving me, because, love, that may sting you when I'm gone; and I'm not grieved, my darling. Most times we're very cheerful, I think.” (257)

この母の言葉通り、ネストは母の死後、人を思いやる優しい心を取り戻すことになる。

3-3 巡回説教師デイヴィッド・ヒューズの導き

エレナは長生きしたいと神に祈らなくなる。娘の傷ついた心を慰める力はないと自覚し、生きる希望も信仰心も失いそうになるが、死の床についたとき、メソヂストの巡回説教師デイヴィッド・ヒューズ (David Hughes) の導きを受ける。娘を慰めることができるように神に祈っても聞き届けてもらえないという訴えに、デイヴィッドはイエスのゲッセマネでの祈りに触れ、「神の時は我われの時とは違う。81年の私の生涯で真剣な祈りが聞き届けられなかったなどということは一度も聞いたことがない。誰も知りえない方法で誰も待ち受けていない時に神の答えはやってきた。予期した答えとは違っていても、…完全で納得のいく答えだった」(258)と自分の経験を語る。この言葉に力づけられエレナは穏やかな死を迎える。

母を失って “No one loves me now.” というネストに、“... if no one loves you, it is time for you to begin to love.” (259) とデイヴィッドは答える。ネストは恋人を愛し、その愛が拒否されて以来優しさを失って残酷になり、母の愛を拒否したまま母を亡くしてしまったことを嘆き悲しむ。

デイヴィッドは、ネストの恋人への愛は若者の激しく狂おしい愛で、これからは自分のことを考えたり見返りを望んだりせず、イエスのように人を愛し、病気の人や疲れた人を喜んで受け入れて愛しなさいと諭し、さらに次のように言う。

“... That love will lift you up above the storms of the world into God's own peace. The very vehemence of your nature proves that you are capable of this. . . . You are powerful enough to trample down your own sorrows into a blessing for others; and to others you will be a blessing. . . . I see it in the answer to your mother's prayer.” (260)

ネストはデイヴィッドの導きの言葉通りの後半生を送り、母の祈りは聞き届けられる。

3-4 ネスト・グウィンの償いの後半生

母から受け継いだ小さな家に、ネストは教区が賄い費を出している知恵遅れのメアリ・ウィリアムズ (Mary Williams) を引き取る。彼女は時に発作を起こし凶暴になるので、預かり先のジョン・グリフィス (John Griffiths) は手を焼いて叩いたり食べ物を与えなかったりした。そんなある日彼女は助けを求めてネストの家に行く。エレナがときどき食べ物を与え優しい言葉を

かけていたことを覚えていたからである。母エレナの保護を求めてやってきたメアリをネストが引き取ったのは、生前母の愛を拒否したことをひどく後悔し、最も困難なことをして償い、安心を求めようとしたからである。メアリが発作を起こすときは、ネストは自分だけが付き添い、人を近づけない。メアリが従順で愛情深く無邪気なことは話しても、ひどく荒れ狂うときのことは誰にも話さない。

メアリを愛すことによって頑なに閉じていたネストの心の扉が開く。ネストに愛を注ぎ続けた母エレナのように、ネストはメアリに愛を注ぎ続け、メアリにとっての「天の恵み」(a blessing 260)になる。メアリも「目の見えない主人を物言わぬ動物が愛すように」(263) ネストを愛した。最初のエピソードの女性と違ってネストは村の人々と付き合い、病人や悲しむ人たちを慰めに出かけるし、子どもたちも好きなとき家に遊びに来る。彼女の心の扉は大きく開いたのである。

事故から30年後、ネストはメアリに助けを借りて泉に行き、岩にもたれたまま静かに息を引き取る。明け方近く彼女は、天国に住む母が嬉しそうに歓迎して彼女に両腕を差し出す夢を見た。語り手は“*She found immortality by the well-side, instead of her fragile perishing youth.*” (265) と述べる。母エレナの娘に対する愛は、壊れやすい男女の愛に勝るものであり、ネストは見返りを求めない愛の実践に生きることによって母の愛に応え、心の安らぎを得る。メアリは発作が起きたときネストの名前を聞くと、自分を抑えようと驚くほどの努力をすることが最後に語られる。

4. むすび

「リジー・リー」では男性に裏切られた女性を救う側に重点がおかれ、「ペン・モーファの泉」では救う側だけでなく当の女性の苦しみとその克服の過程が描かれている。

イエスを神ではなく人間と見て倫理上の理想とし、理性を尊重し、愛の実践を重んじ、人間の善性、可能性を信じ、原罪を認めない。こうしたユニテリアンの信条がギヤスケルの創作の基盤となっているが、この二つの短編、特に「ペン・モーファの泉」では、それが顕著に表れている。

二つの短編に登場する女性たち、忍耐力をもって困難に立ち向かう行動力あるアンやスーザン、エレナとネスト母娘を見ると、家父長制社会にあつて弱い立場にある女性も愛と信仰の力によってかなりのことができるのではないかと思われる。しかし、ギヤスケルが彼女たちを、夫や父のいない、しかも経済的には困窮しない状況下に置いていることを見過ごしてはならないだろう。夫や父がいないのは、頼る者がいなくて自分で考え行動せざるを得ない逆境にあるとも言えるのだが、服従すべき相手がいなくて自分の裁量で自由に行動できるということでもある。アンやエレナは、経済面をあまり考慮する必要もなく、支配する夫、服従すべき夫もないがゆえに、娘に対する思いを何とか行動に移すことができるのである。

一方、81歳の巡回説教師デイヴィッドを除く男性登場人物、ジェイムズ、ウィル、スーザンの父、エドワード、ジョン・グリフィスなどについては、かなり批判的に描いてある。ギヤスケルは、『ハウスホールド・ワーズ』誌には作品が匿名で掲載されることを知って、ある程度自由に、タブー視されている問題や社会通念に必ずしも合致しないことを取り上げ、時代の規範に批判の矢を放ちつつ、母、妻、あるいは娘として女性は、どのような状況下でどのように力を発揮することができるのか、書くことによって試していたのではないかと思われる。

引証資料

Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.

Gaskell, Elizabeth. "Lizzie Leigh", "The Well of Pen-Morfa". *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. by A.W. Ward, Vol. 2. 1906: New York: AMS Press, 1972.

Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1976.

Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer*. Manchester: Manchester University Press, 1965.

Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. New York: Russell & Russell, 1973.

Shattock, Joanne. Headnote to "Lizzie Leigh", Headnote to "The Well of Pen-Morfa", Headnote to "The Heart of John Middleton". *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 1 Journalism, Early Fiction and Personal Writings. Ed. by Shattock. London: Pickering & Chatto, 2005.

Shelston, Alan. Headnote to *The Moorland Cottage*. *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 2 Novellas and Shorter Fiction I. Ed. by Shelston. London: Pickering & Chatto, 2005.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: The Harvester Press, 1987.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

Walters, Anna. Introduction to *Elizabeth Gaskell: Four Short Stories*. London: Pandora Press, Routledge & Kegan Paul, 1983.

多比羅真理子『ギヤスケルのまなざし』鳳書房、2004。

松岡光治「ギヤスケルの短編小説における愛の諸相—沈黙、憎しみ、母、自己犠牲—」山脇百合子監修『ギヤスケル文学にみる愛の諸相』北星堂書店、2002。

外国語学習におけるトップダウン処理と L1 の影響

Top-down Processing in Foreign Language Learning and the Influences of L1

梅原 大輔
Daisuke UMEHARA

1. 文法指導と文法能力

外国語教育の場では、文法指導はしばしば否定的な評価を受ける。1950 年代から 60 年代を席卷したオーラルアプローチ(Oral Approach)は、反復訓練によって文法を習得させる「科学的な」教授法とされたが、その後、理論的、経験的に基盤を失った。1970 年代に見られた語用論の発展や、コミュニケーション能力の概念の精緻化を経て、1980 年代になると言語の持つ伝達機能や意味を重視したアプローチが外国語教授の中心的な方法となった。Krashen が 80 年代に提唱したナチュラルアプローチ(Natural Approach)では、明示的な文法指導は言語の習得に直接結びつかず、せいぜい発話した文の文法性を後追いで検証するモニターの機能しか持たないと仮定された(Krashen and Terrell 1983)。現在の日本でも広く受け入れられているコミュニカティブアプローチ(Communicative Approach)では、形式面での正確さ(accuracy)よりも流暢さ(fluecy)に重きを置く。また学習者の文法的な誤りを逐一訂正することで流暢さが阻害されないように、意味の伝達を重視し、過剰に誤りを訂正しないという考え方も広がっている。

しかし一方で、母語話者が持つ文法能力の存在そのものが否定されているわけではない。オーラルアプローチの根拠である行動主義心理学を正面から批判した Chomsky が主張したのは、母語話者の文法能力は人が生得的に持つ能力で、習慣づけによって後天的に獲得されるようなものではなく、それゆえ反復練習による言語学習の方法を否定したのである¹⁾。ナチュラルアプローチは、母語(L1)の習得と外国語(L2)の習得には原理的な違いはない、と前提しており、やはり、母語話者が持つ文法能力そのものを否定しているわけではない。自然なインプットの蓄積によって—そして自然なインプットの蓄積によってのみ—母語話者が持つ暗黙の文法能力が習得されると考えたのである。また、Krashen への反論として文法に対する意識的な学習の有効性を主張する流れにおいても、母語話者の文法能力を認めるという前提に変わりはない。だとすると外国語教育・外国語学習の課題の一つは、母語話者が持つ文法能力をいかにすれば外国語学習者に獲得させられるのか、という点にあると言えよう。

本稿の目的は、L2 の文法学習におけるトップダウン処理の役割を鳥瞰し、そこに学習者の L1 がどのような影響を与えるのかを概観することである。ここで言うトップダウン処理とは、

句を分解してさらに小さな句、あるいはその構成規則を取り出す帰納的、発見的な過程のことである。これは、あらかじめ存在する文法規則と語彙情報の組み合わせによって文を処理する演繹的な過程—「語と文法のアプローチ」—と共存し、補いあうものと考えられる。最初に「語と文法のアプローチ」を概観し、続いて句の役割を重視したトップダウン処理の働きを説明する。その上で、英語学習者の言語意識に関するデータをもとにして、トップダウン処理による学習過程で L1 がどのように影響するのか考察する。

2. 「語と文法のアプローチ」を越えて

2-1 「語と文法のアプローチ」

言語に対する古典的な、しかし現在でも広く浸透している見方は、言語を語彙と文法規則からなる体系だと考えるものである。われわれはこのような見方を「語と文法のアプローチ」と呼ぶことにする。生成文法や形式意味論のように、言語を計算的なアルゴリズム体系ととらえる理論は、「語と文法のアプローチ」を基本的な前提としている。

「語と文法のアプローチ」が依拠するのは構成性(*compositionality*)の原理である。文を作る最も基本的で最も単純な要素は語とされ、それぞれの語は音形と意味が結びついた単位である。語はまた文法カテゴリーに基づく統語的な属性を持っており、それによって他の語との結びつき方が規定される。こういった属性を統語機能と呼ぶことにしよう。語が組み合わさってできた句もまた、音形と意味が結びついた単位であり、更に句もまた、他の語句とどのように結びつくのかという統語機能を持っている。語は統語機能に従って次々と適切に結びついていくことで、句や文を構成する。例えば前置詞は一つの名詞句と結びついて前置詞句を作る。前置詞句はそれ自体では完結した要素でなく、更に他の要素に対して修飾語として結びつく。語から文を構成していく過程では部分の意味の総和が全体の意味になり、語に由来しない意味は現れない。また逆に言えば、文が表す意味は、適切に分解していくことによって全て、語に還元することができる。

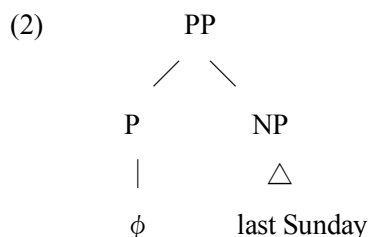
しかし実際には自然言語の中では、「語と文法のアプローチ」でうまく説明できない構造がしばしば現れる。次の二つの文を比べてみよう。

- (1) a. John often plays tennis *on Sunday*.
- b. John played tennis *last Sunday*.

二項動詞の機能を持つ *play* は二つの名詞を項として結びつける。*On Sunday* のような前置詞句は項にはならず、*play* を修飾する句として適切に解釈される(1a)。一方(1b)の *last Sunday* は形容詞と名詞が結びついた名詞句であるが、働きの上では項としてではなく修飾語と解釈しなければならない。しかし *last Sunday* を分解しても、この句が修飾語として副詞的に働くということ

を位置づける語が出てこないのである。

「語と文法のアプローチ」を守ろうとするのであれば、*last Sunday* が他の名詞句とは違うことを何らかの形で説明しなければならない。一つの可能性は、この名詞句には実は音形のない前置詞が隠れていると考えることである(2)。これによって、*last Sunday* 自体は紛れもない名詞句でありながら、なおかつ他の前置詞句と同じように修飾語として働くことを、構成的に説明することができる。



ただし、このような構造が全ての名詞句に適用できるものではなく、*last* へのような特定の句に限られたものである以上、何らかの語彙的な制限がなければ、誤った構造を過剰に生成してしまうことになるのである。だが、NP 内の修飾語にすぎない *last* が NP 外にある P の選択を直接に制限するということは構成性の視点から大きな問題があり、結局うまく解決できない問題が残ってしまうのである。

2—2 句の役割とトップダウン処理

「語と文法のアプローチ」は広く受け入れられている言語観だと思われる。しかし語用論や認知言語学の研究が進んだ現在、純粋な形で「語と文法のアプローチ」に基づく言語理論を保持しようとするのは難しい。部分の意味を組み合わせるだけでは全体の意味に至らないような多くの例が指摘されているし、基本レベルカテゴリーやゲシュタルトの考え方は、最小の単位が必ずしも最も単純な単位ではない、ということを示している。

構文文法(Construction Grammar)は、語より大きな単位である構文を実体のある単位として扱う理論である。例えば、*laugh* や *sneeze* は元来自動詞であるが、使役移動構文と呼ばれる構文では、他動詞として用いることができる。

(3) a. They *laughed* the poor man out of the room.

b. Frank *sneezed* the tissue off the table.

(Goldberg 1995: 152)

ただしこれらの文は目的語の後に移動の結果を表す場所の句(*out of the room*, *off the table*)があって初めて可能になるものであり、*laugh* や *sneeze* には他動詞の用法もある、と語に還元した説明をすると、不適格な文を過剰に許すことになってしまう。構文文法が説明するのは、使役移

動構文という構文自体が実体として存在する、というものである。他にも二重目的語構文、結果構文、*way* 構文など、構文文法の手法が高い説明力を持っている現象がある(Goldberg 1995)。

品詞の面からも、句のレベルが文法的に独立した実体を持っていると考えるべき根拠がある。語ではなく句にのみ与えられる情報は、文法関係に関わる情報である。名詞や形容詞といった品詞とは異なり、主語や目的語、修飾語といった文法関係の情報は語に還元することができない。このため「語と文法のアプローチ」にとっては、文法関係ではなく品詞が基本要素となる。生成文法では当初から、主語や目的語といった概念は構造から定義可能な派生的概念であると考えてきた。

It is necessary only to make explicit the relational character of these notions by defining “Subject-of,” for English, as the relation holding between the NP of a sentence of the form NP[^] Aux[^] VP and the whole sentence, “Object-of” as the relation between the NP of a VP of the form V[^] NP and the whole VP, etc. (Chomsky 1965: 69)

このように考えれば、名詞句に対して主語や目的語や修飾語というラベルを貼ることは冗長であり、必要ない²⁾。しかし実際には、文法関係が言語体系の中で実体を持っていることは間違いない。例えば「副詞」について考えてみよう。

副詞は基本的な品詞の一つに思えるのだが、生成文法の中では周辺の位置に置かれてきた。Chomsky(1970)は X⁻バー理論の枠組を提示する中で、語彙範疇を[±N]と[±V]の組み合わせとして表現したが、これによって得られるのは N、V、A、P の四つであり、副詞は含まれない。副詞が「語と文法のアプローチ」にとってやっかいなのは、それが基本的に修飾語という関係的な役割を担っているためである。次の例を見よう。

(4) *When* did John arrive?

—He arrived *at noon*.

(5) *Why* is Mary so angry?

—*Because her parents wouldn't say yes to her plan.*

統語論の入門書が一般的に説明しているように、品詞を判断するための客観的なテストとして置き換えテストが用いられる。文の中で置き換え可能な要素は同じ品詞だとするものであり、疑問詞や代名詞による置き換えは、その典型的な例である。

今、(4)の *when* は *at noon* という前置詞句に相当している。そうすると *when* を PP と考えるべきだろうか。生成文法のシステムでは句は主要部を持たなければならないため、*when* が PP であるとすればすなわち *when* が前置詞であると言わざるを得ない。しかしこれは明らかに不自然な結論である。われわれの一般的な直観にかなっているのは、*when* は *at noon* が表す「副詞句」を代用しているとするものである。一般的な学習文法や辞書では *when* を副詞と分類し

ているが、この「副詞」は語に対してつけられたラベルではなく句に対してつけられたラベルなのである。しかしこのように語に還元できない品詞は、「語と文法のアプローチ」の中では扱うことができない。同じことはまた(5)の *why* についても言える、*why* が *because* 節に対応するからといって、*why* 自体の品詞が S であると考えるのは奇妙である。

「名詞句」「名詞節」と呼ばれるものについても同様である。生成文法で名詞句とは主要部に名詞を持つ句である。一方、学校文法で名詞句や名詞節と呼ぶものは、主語や目的語など名詞的な機能を文中で果たしている句構造全般を指す。そして代名詞の *it* や *what* は名詞の代用としても「名詞節」の代用としても使うことができる。

(6) *What did John say?*

—He said *he would never meet me*.

(6)の *what* は名詞節の代用をしている S なのか、と考えるべきではない。*what* は *say* の目的語である名詞役割の句を代用したものなのだ。

不変化詞の分析についても同じことが言える。*get up* の *up* や *put on* の *on* が不変化詞と呼ばれるのは、これらが前置詞とは違って目的語を取らないからである。Emonds (1985)は、前置詞の中には動詞と同じようにいろいろな構文を取るものがあり、目的語を一つ取るものだけを前置詞と定義する必要はないとしている。これによると不変化詞は、目的語を取らない自動詞相当の前置詞ということになる。一般の辞書が不変化詞を副詞と呼ぶのは、それが一語で副詞句の機能を持っているためであり、ここでもやはり句の働きに対してつけられている名前を語の品詞に転用していることになる。

ここまで、*where*、*why*、*what*、*up*、*on* のように句に基づく品詞が語に与えられている例を見てきた。一語の場合であれば、句と語の混在は目に見えてこない。しかし、句に与えられる品詞が、その句を構成する語のレベルに還元できないような場合には、句のままで語彙化される場合がある。そのようにして品詞の再解釈がなされている例を次に見よう。

英語には、名詞句の中で名詞主要部の左側に形容詞句を置く構造がある(7a)。これを機能としてとらえなおすと、名詞主要部の左側に修飾語が置かれているということになる(7b)。



修飾語である AP は名詞主要部の性質、状態、数量などを限定する働きをする。すると、この位置に置かれ、修飾語の意味を持つと解釈できる要素は、形容詞句と分析することができる。

(8)の *a number of* がそういう例である。

(8) *A number of employees were fired.*

この *a number of* は中心に形容詞の主要部を持たないだけでなく、構造上は不連続な連鎖である。しかし、名詞を修飾する機能を持っていることから、*a number of* 全体を一つの形容詞句としてとらえることができる。このような分析ができるのは、一つの NP には定性に関する情報が一つだけなら許されるという条件を踏まえているからだと言える。*A number of* は *many* と同じく不定の量を表しており、*employees* の定性と矛盾しない。これに対して例えば *many of the employees* という句の中から *many of the* の連鎖を形容詞句として取り出せないのは、その中に不定と定の二つを同時に抱え込んでしまうからである。

同じような例として補語として用いられる形容詞句を挙げよう。動詞 *feel* は後ろに形容詞句を伴うことができる。ここから、(9a) の *fine* と同じく (9b) の *at home* も形容詞句として解釈できる。

(9) a. I feel *fine*.b. I feel *at home*.

実際、*at home* は比較級にしたり (10a)、名詞に前置して使うなど (10b)、完全な形容詞の性質を獲得している。

(10) a. Although I was born in America, I feel *more at home* in Ghana than in America. I truly feel I am an African. (news.bbc.co.uk/2/hi/business/6247523.stm)b. We use the highest quality components to provide exquisite comfort, and the cozy *at home* feeling. (椅子の広告)

これらの例は、品詞の決定にトップダウン型の処理が関与していることを示唆している。トップダウン処理では、語のレベルまで情報を還元できなければ、句のレベルで処理を止めることができる。一方、「語と文法のアプローチ」では、語のレベルが全ての出発点となるのであり、上のような例は例外的なものとして処理せざるをえない。

大人の「完成した」文法を見ているだけでは、このような例は周縁的なものと思われるかもしれない。しかし、子どもの L1 習得にあたっては、トップダウン処理が大きな役割を持っているとする研究がある。Peters (1983) は L1 の習得に関して、子どもは最初に句を未分化の単位 (unit) として習得し、その後にもっと小さな単位へと分割していくのだ、と述べている。例えば、句を分割する時には、1) 末尾を切り取る、2) 先頭を切り取る、3) 強勢を受けるかたまりを切り取る、4) リズムの上で目立つかたまりを切り取る、5) イントネーションの上で目立つかたまりを切り取る、6) 繰り返されているかたまりを切り取る、といった原則に基づいており、その上で切り取ったかたまりについて、頻度、意味のまとまりといった視点から、妥当性を検証し、場

合によっては再分析するのだと主張している。

句を重視する動きは、外国語教授法にも見られる。句の重要性を体系的に取り上げる流れは、Willis (1990)によるレキシカルシラバスに端を発する。更に、Michael Lewis はレキシカルアプローチ(Lexical Approach) (Lewis 1993, 1997)を提唱し、この流れを推し進めようとしている。レキシカルアプローチのスローガンは“Language consists of grammaticalised lexis, not lexicalised grammar”というものであり、従来、語と文法に置かれてきたウェイトを、もっと句に移すように提案するものである。Lewis は次のように述べている。

Modern analysis of real data suggest that we are much less original in using language than we like to believe. Much of what we say, and a significant proportion of what we write, consists of prefabricated multi-word items. (Lewis 1997: 11)

ただし、Lewis(1997)の中で繰り返し述べられているように、彼は文法の必要性を疑っているわけではない。

The Lexical Approach suggests the content and role of grammar in language courses needs to be radically revised but the Approach in no way denies the value of grammar, nor its unique role in language. While the Lexical Approach emphasises probable language, based on observation of ‘used’ language, it recognises clearly that lexis is not enough and that courses which totally disregard grammar are doing learners a serious disservice. (Lewis 1997: 41)

むしろ、レキシカルアプローチの中では、文法とは句をもとにトップダウン処理によって作り上げていくものと考えられている。

Grammatical knowledge permits the creative re-combination of lexis in novel and imaginative ways, but it cannot begin to be useful in that role until the learner has a sufficiently large mental lexicon to which grammatical knowledge can be applied. (Lewis 1997: 15)

Peters が L1 の習得に関して述べたのと類似したこのような発見的な学習過程を、Lewis は、OHE (Observe-Hypothesise-Experiment) のパラダイムと呼び、従来型の PPP (Presentation-Practice-Production)のパラダイムと対置させている。

Skehan (1998)は外国語学習を認知的な立場から分析する中で、言語処理に関わる二つのモードを取り上げている。規則に基づくシステム(rule-based system) は、処理の負担は高いが、記憶の負担は低く応用力がある。これに対して用例に基づくシステム(exemplar-based system) は、記憶への負担はあるが、処理の負担は低い。重要なのは、二つの処理方法の一方が正しいということではなく、両者が共存しており、その時々二つの処理のどちらを選ぶかはコストパフォ

一マンスの問題だということである。

大人の文法で分析の難しい構文やイディオムだけを対象にするのではなく、明らかに分析可能で「透明な」文に関しても、未分析のままで処理してもよい、と考えることで、言語の習得を発展的な過程としてとらえることができるようになる。これは外国語学習における中間言語の観点とも整合するもので、大きな意味がある。

3. 句の分解と母語の影響

ここまで、「語と文法のアプローチ」だけでなく、句を重視したアプローチの位置づけ、そして句から文法を取り出すトップダウン的な学習の仕組みを鳥瞰してきた。語と文法だけを見るのではなく句を意識する、という指導法は、これまでも日本の英語教育の中では広く行われてきた。特に高校生を対象にした参考書には、まとまった数の「重要構文」を扱ったものが多数あるし、中には「公式」として教えられてきた構文もある。「イディオム」という用語も浸透しており、しばしばコロケーションや一般的な句表現をも含む意味で使われている。しかし、こういった方法は英語学習を大量の知識の詰め込みとみなすことにつながり、典型的な「受験英語」として否定的に見られることも多い。句を重視するアプローチを取ることがこれと同じような句の詰め込みに終わってしまうのであれば、成果を期待することは難しい。

先に見たように、未分析の句は学習者の中にデータとして蓄積され、それをもとにして句を分析的に解釈することが行われ、その結果さらに小さな句を分離する、という過程があると考えよう。句のアプローチを生かすためには、このような分析的、帰納的な方法を学習ストラテジーとして活用することが必要になってくる。成功する学習者が分析的な学習ストラテジーを持っていることは知られている。例えば Oxford (1990)は学習者が持つ認知ストラテジーの一つとして「分析すること (Analyzing)」を挙げている。

Many learners, especially adults, tend to “reason out” the new language. They construct a formal model in their minds based on analysis and comparison, create general rules, and revise those rules when new information is available. (Oxford 1990: 44)

このような学習ストラテジーがあるということは、学習者が文法に対して意識的にアプローチしている根拠となる。また一般に学習ストラテジーがそうであるように、こういった学習方法は訓練によって学習者に身につけさせることができるはずである。

文や句を小さな単位に分割することは、学習者が一般に持つ自然な意識だと思われる。次は、梅原(1999)で挙げた、学習者自身が書いた英語観を引用したものである。

(11) 「日本語では主語が単数であろうと複数であろうと「は」は「は」である。しかし、

英語は主語によって *am* であつたり *are* であつたりと変化するのはなぜだろう？」

- (12) 「英語では過去、現在、未来のことを話す時「一は」の意味である *is* が *was* や *will be* に変わるけど、日本語では時制に関係なく「は」は変わることがない。」

これらの例に見るように、例えば *I am Japanese.* という文を分解する場合、*I am* というかたまりが目につく。ここから *I am* を「私は」という意味の句ととらえたり、さらに分解して *am* を「一は」という（一語の）句として取り出したりすることもある。同様に *am* を「です」という丁寧さを表すための句ととらえる場合もある。授業の中で *be* に対してこのような意味づけを教えることはないだろうから、これは学習者自身が自らトップダウン的なアプローチを取って、教えられてもない仮説を構築したことを示している。

同時にまたこの例からは、句の意味を L1 と一対一に結びつけることで誤った分析をしてしまう危険性を示唆している。先に、言語表現は音形と意味と機能とが結びついたものであると述べたが、L1 への翻訳を通して L2 の句の意味を理解する、というストラテジーは、L1 の学習においては存在しない方法である。翻訳ストラテジーを利用することから誤りの生じる危険があるということが、L1 と L2 の学習に見られる大きな違いであると考えられる。以下では、梅原(1999, 2007)からの引用を利用しながら、句と文法の理解にあたって L1 がどのような影響を与えるのかについて考察する。

文として完結した定型表現は使用場面さえ適切に理解していれば、未分析のまま使うことができる。あいさつやスモールトークなど、外国語学習の最も初期に覚える表現の中にはこういったものが多い。*Thank you.* という表現は感謝を表す場面でこのまま使えるのであって、これを統語的に分解して意味解釈し、なぜ命令文でもないのに動詞から始まっているのか、などと考える必要はない。ただし、このような定型表現であっても、学習者がその表現の意味を L1 との対応によって理解しようとする、ずれが生じることがある。例えば *Can I help you?* を「いらっしゃいませ」という日本語の意味に対応づけて覚えるとしよう。日本語の「いらっしゃいませ」は客を迎える単なる挨拶であり、レジにいる店員や百貨店のエレベーターガールが発することもできる。このような場面での「いらっしゃいませ」を *Can I help you?* と表現することはできない。*Can I help you?* の意味を分解して考えない学習者にとって、両者の違いは自明ではないのである。

一般に、文から句へ、句から語へと小さな単位に分解するほど、L1 との対応関係が不透明になり、意味の上でも L1 の干渉を受けやすくなると言える。文とは違い句のレベルになると、統語的機能にも配慮しなければならないのだが、L1 への翻訳を通して意味の対応だけを重視すると、統語的機能を意識できなくなるおそれがある。これを *look forward to* の例によって確認しよう。この句は *look forward to -ing* という形で提示されることが多いが、それは本来、*to* が不定詞のマーカ―ではなく前置詞であることを示す意図がある。しかし、「前置詞の後ろには名詞句を置く」「動詞句を名詞句として使う時には動名詞の形にする」という二つの一般的な規則を習得していない限り、*look forward to -ing* という句を「決まった形」として覚えてしまう方が、

処理の負担が小さいのである。この構文の典型的な例において、この戦略はうまく行く。しかし、(13)のような例に対して、非常に多くの学習者が、誤って正しい文と認識してしまうという事実がある。

(13) *I'm looking forward to coming the summer vacation.

この文は「述語の左に主語を置く」という一般的な規則を破っているため不適格である。しかし、*look forward to -ing* という表現を未分析な句として処理する学習者にとっては、*to -ing* という連鎖が重要なのであり、主語が後ろに回されていることについては、意識が向けられないのである。(13)を適格とする学習者は、*look forward to -ing* という構文があるから、と特定の形式だけに判断基準を求めている。

梅原(2007)で扱った *Let's* 構文の文法性判断についても、句のアプローチは興味深い視点を与えてくれる。梅原(2007)では、*Let's* を含む 10 文の文法性判断を学習者に求め、非文法的と判断した文については、なぜそう思うのか説明を求めた。その結果、例えば(14)の a から d に進むにつれて、文法性の判断を誤る学習者が増えることがわかった。

(14) a. *Let's sing a song.*

b. **Let's playing basketball.*

c. *Let's be friends.*

d. **Let's cooking.*

Let's sing a song. を正しい文だと判断できる学習者が、同時に *Let's playing basketball.* を正しいと判断することがある。この場合、*Let's* を原形の動詞句と連結する、という統語機能には意識を向けず、「～しましょう」という L1 への翻訳を通して理解しているようだと言われた。また *Let's playing basketball.* が誤りであると自信をもって判断しているような学習者であっても、*Let's be friends.* を非文法的と判断する場合がある。このときにも「～しましょう」という L1 の意味に状態動詞がうまく適合しないことが原因の一つとなっていた。更に、*Let's cooking.* という文を正しいと判断する学習者の割合が極めて高いことは、句全体の響きのよさ、あるいは実際にどこかで聞いたことがあるという感覚が、句内部の文法的な分析による判断をくつがえしているのではないかと思われた。成功した学習者にとっては、(14)の各文の文法性の判断など、一つの単純な規則で処理できるのではないかと思えるかもしれない。あるいは *Let's* を *let* と *us* に分解できることがわかれば、判断を迷うことはないと思えるかもしれない。もちろん、明示的な構文指導によって、この構文を簡単に身につけてしまう学習者もあるだろう。しかし、少なくとも学習成功者が考えるほど構文の習得は簡単ではなく、同じ構文であっても学習者の文法判断はさまざまな要因に影響されることは、理解されるべきである。

大きな句から小さな句を取り出す際に、句を統語的に分解できたとしても、意味を構成的に

分析できない場合がある。特に機能語が含まれる場合や比喻表現が含まれる場合、語レベルでの翻訳ストラテジーをとることが難しくなる。このため学習者は、次のような悩みを持つことがある。

- (15) 「高校三年の夏休みが始まりだしたころ、私は大学受験勉強の中で、口語表現や、慣用表現の分野を勉強し始めて、今まで使っていた文法のルールが全くあてはまらないことに気が付き、大変ショックを受けました。特別な単語のつながりで特別な意味があり、なかなか覚えることができませんでした。」(梅原 1999)
- (16) 「口語表現では、例えば *Mind your own business!* これは英語を見てみると *business* が入っているので仕事関係のことかな? と推測し、調べてみると「大きなお世話だ」という意味でした。かなりショックでした。どうして *business* が入っているのか、不思議で仕方ありませんでした。この謎は今も解明していないままです。私たち日本人は、一つの単語には一つの意味しかないので、多義語を持つ英語を難しいと思うでしょう。」(梅原 1999)

しかし L1 への翻訳を通さず、L2 の語と文法の仕組みから L2 をとらえることができるようになると、学習者に気づきをもたらすことができる。このような気づきは、しばしば学習者にとって大きな発見となる。L2 内部での対応への移行が進むと L1 の相対化、メタ言語意識の発達へとつながっていくのだろう

- (17) 「しかし私はイディオムを覚えていくうちにあることに気づきました。例えば、*turn down* は「拒否する」という意味ですが、これを単に覚えるのではなく、こじつけて、まっすぐ行こうとしているのにじゃまされて曲がると覚えたり、いろいろと私なりに工夫して覚え、今まで納得ができなかったのがよくわかるようになりました。」(梅原 1999)

こういった意識が高まることが、言語形式に対する意識高揚(*consciousness raising*)なのだとと言える。句の蓄積から分析的な意識に移行するように学習者を導くことが、文法の習得にとって重要な過程となるだろう。

4. 結語

トップダウン処理に基づく発見的な文法習得論は、学習者がさまざまなレベルで句を未分析のまま理解していることを想定している。そしてまた、学習者が未分析の句の意味を L1 の表現と一対一に結びつけて理解している可能性を含んでいる。だが、実際に学習者がさまざまな

構文に対してどのような意識を持っているのかについて、これまでほとんど研究が行われてこなかった。まずはそういった領域でのデータを蓄積し、日本人の英語学習者に共通する傾向が存在するかどうかを検証する必要がある。

その上で、学習者に帰納的な学習を手助けする方法を構築する必要がある。特に L1 との結びつきだけで句の意味を理解させないために、比喩の解釈など、分析的な解釈を通してメタ言語的意識を高める訓練が求められるのではないだろうか。

注

- 1) Chomsky 自身は外国語学習者が、母語話者の文法能力を身につけることができるのかどうか、といった応用言語学的话题については言及をしていない。生成文法の成果を言語教育に取り入れようとする認知コード学習と呼ばれる教授法が 1970 年代に注目されることはあったが、この方法が現在支持されているとは思えない。
- 2) これに反対し、文法関係の方を基本概念として取扱う方が文法のシステムにとって望ましいと主張するのが、Bresnan らによる語彙機能文法(LFG)である。

参考文献

- Chomsky, N. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, 1965.
- Chomsky, N. "Remarks on Nominalization" In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum *Readings in English Transformational Grammar*. Ginn, 1970. 184-221.
- Chomsky, N. *Studies on Semantics in Generative Grammar*. Mouton, 1972.
- Emonds, J. *A Unified Theory of Syntactic Categories*. Foris, 1985.
- Goldberg, A.E. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, 1995.
- Krashen, S.D. and T.D. Terrell *Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Alemy Press, 1983.
- Lewis, M. *The Lexical Approach: The State of ELT and a Way Forward*. Thomson, 1993.
- Lewis, M. *Implementing the Lexical Approach*. Thomson, 1997.
- Oxford, R.L. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Heinle and Heinle, 1990.
- Peters, A.M. *The Units of Language Acquisition*. Cambridge University Press, 1983.
- Skehan, P. *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford University Press, 1998.
- 梅原大輔 「英語学習者の英語意識」『甲南女子大学研究紀要』第 35 号、1999、1-26。
- 梅原大輔 「英語学習者の多義語意識」『甲南女子大学英文学研究』第 38 号、2002、1-13。
- 梅原大輔 「Let's 構文への文法意識とその習得」『甲南女子大学研究紀要』第 43 号、2007、21-28。
- Willis, D. *The Lexical Syllabus: A New Approach to Language Teaching*. Collins, 1990.

編 集 委 員

直野裕子・Stephen H. Brown・浅井紀代

平成19年3月30日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会
神戸市東灘区森北町6丁目2-23
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム
TEL (078) 413-3124

編集代表

林 礼 子
